山へ帰りゆく父

小川未明

青空文庫

父親は、遠い街に住んでいる息子が、どんな暮らしをしているかと思いました。そして、どうか一度いってみたいものだと思っていました。

しかし、年を取ると、なかなか知らぬところへ出かけるのはおっくうなものです。そして、自分の長らく住んでいたところがいちばんいいのであります。

「私は、こんなに年をとったのに、せがれはどんな暮らしをしているか心配でならない。今年こそはいってみよう。」

父親は、遠い旅をして、息子の住んでいる街にやってきました。

それは、にぎやかな都会でありました。

静かな、夜などは、物音ひとつ聞こえず、まったくさびしい田舎に住んでいました人が、停車場に降りると、あたりが明るく、夜でも昼間のようであり、馬車や、電車や、自動車が、往来しているにぎやかな有り様を見て、びっくりするのは無理のないことです。父親も、やはりその一人でした。

「お父さん、よくおいでくださいました。」といって、息子はどんなに喜んで迎えたかしれません。

息子はいまでは、この都でなに不自由なく暮らしていられる身柄でありましたから、父親に、なんでも珍しそうなものを持ってきて、もてなしました。また、方々へ見物にもつれていったりいたしました。

父親は、はじめのうちは、どこへいってもにぎやかなので驚いていました。また、いままで口にいれたことのないようなものを食べたりして、こうして、人間が暮らしてゆかれたら、しあわせなものだとも考えられたのでした。

五日、六日というふうに同じことがつづきますと、そのにぎやかさが、ただそうぞうしいものになり、また、毎日ごちそうを食べることも、これが人間の幸福であるとは、思われなくなりました。

「お父さん、おもしろい芝居が、はじまりましたから、いってごらんになりませんか。」

「いいや、見たくない。」

「お父さん、これから、なにかうまいものを食べに出かけましょう。」

「いいや、なにも食べたくない。」

父親は、じっとして、家の中に、すわっていました。

「どうしたのですか？　お父さん。」と、息子は、なにをいっても、父親が気乗りをしないので、心配して問うたのでありました。

「私は、国へ帰りたくなった。」と、父親は答えました。

息子は、これを聞くと、目を円くして、

「あんなさびしい山の中へ帰ってもしかたがないではありませんか。どうして、あの不便なところがいいのですか？」と、息子は、父親の心をはかりかねて、たずねました。

「私は、国へ帰りたい。」と、父親は答えました。

「お父さん、なにかいけないところがあったら、いってください。また私たちが、気のつかないところがあったら、これから気をつけるようにしますから、もっと、こちらにいてくださいまし。そのうちに、お父さんは、この街の生活にも、おなれでありましょうから……。」と、息子は、ひたすら真心をあらわしていいました。

すると、父親は、頭を振って、

「いや、私は、かえっておまえが国に帰るように、つれにきたのだが、おまえは、帰らないか？」といいました。

「どうして、お父さん、私が、帰ることができましょう？」

息子は、父親の顔を見つめて、あきれた顔つきをしました。

それから、日ならずして、老人の故郷に向かって旅立ってゆく、姿が見られたのであります。

その日は、一日、息子は、家にいて、父親のことを案じていました。

「あんなに、お年をとっていられるから、道中なにか変わったことがなければいいが……。」

「いまごろ、汽車はどのあたりを通っているだろうか……。」

いろいろと息子は、思いました。そして、道すがらの景色などを思い出しては、目に描いていたのであります。

汽車は、高い山々のふもとを通りました。大きな河にかかっている鉄橋を渡りました。また、黒いこんもりとした林に添って走りました。白壁の土蔵があったり、高い火の見やぐらの建っている村をも過ぎました。そして、翌日の昼過ぎには、故郷に近い停車場に着くのでありました。

「いまごろは、お父さんは、あの街道の松並木の下を歩いていなさるだろう……。」と、息子は、都にいて思っていました。

それは、広々とした、野中を通っている、昔ながらの道筋でありました。年とった松が道の両側に生い立っていました。野の面を見わたすと、だんだん北の海の方に伸びるに従って、低くなっていました。そして、その方の地平線は、夕暮れ方になっても、明るくありました。

山には、せみやひぐらしが鳴いていました。老人は、もう多年この山の中に生活をしています。道すがらの木も、草も、石も、またこの山にすんでいる小鳥や、せみや、ひぐらしにいたるまで、毎日のように、この山道を歩く老人の咳ばらいや、足音や、姿を知らぬものはありません。

父親が、街道を歩いていますと、電信柱の付近に鳴いているつばめは、「いま、お帰りですか。」と、いうように聞こえました。夕焼けの空は、昔も、今も、この赤い、悲しい色に変わりがありません。父親は、夕焼けの空をながめました。

「よく、自分は、せがれの手を引いて、夕暮れ方、町から帰ったものだ。あの時分のせがれは、どんなに無邪気で、かわいらしかったか。あのせがれがいまでは、りっぱな人間になったのだ。私が、こんなに年をとったのも、無理はない……。」と、考えにふけったのでした。

そして、老人は、いよいよ山道にさしかかりますと、山の上は、まだ、ふもとよりは、もっと明るくて、ちょうが飛んでいました。

「いま、おじいさんお帰りですか？」と、いっているように、人なつかしげに、老人の身のまわりを飛んでいました。せみも、ひぐらしも、このとき、みんな声をそろえて鳴きたてました。

「よう帰っておいでなさいました。あなたのお山は、いつでも平和です。おじいさん、あなたは、いつまでもこのお山においでなさい。そして、けっして、ほかへゆくなどと思いなさいますな。」と、みんなしていっているように聞こえました。

おじいさんは、にこにこしていました。

「なんで、こんないいところを捨てて、他国へなどゆけるものか。」

いつまでも、いつまでも、この山の中の自分の家に、暮らそうものと思いました。そして、その憐れげな、小さな影を道の上に落としながら、一歩、一歩、登ってゆきました。

こうして、父親は、また、故郷の人となったのであります。

こんどは、息子が、毎日のように父親の身の上を心配しました。「お父さんは、ほんとうに年をとられた。」と、彼は父親の姿を目に思い浮かべました。自分が子供のとき、父親の後からついて町へゆき、また山に帰ったときは、父親は、まだ若く、力が強く、達者であったのです。そう考えると、なぜ早く、この都へ越してこられないものかと案じていました。

「あのさびしい、不便な、田舎がなんでいいことがあろう。ぜひ、今年の中に、迎えにいってつれてこなければならない。」と、息子は毎日のように思っていました。

それに、秋から、冬にかけて、山の中は、風が寒く、吹雪がすさまじいのでありました。息子は、故郷にいた時分の記憶をけっして、忘れることができません。

「雪の積もる冬は、お父さんは、どうしてあんなところで暮らされよう。」

息子は、とうとうお父さんを、自分の住んでいるにぎやかな街へ迎えるために、久しぶりで故郷へ帰ったのであります。

息子は、自分の生まれた、古い家の中へはいりました。すると、いろいろの思い出が、そのままよみがえってくるのでした。壁板に書いた、子供の時分の楽器が、なおうすく残っています。よく鳥かごをかけた、戸口の柱の小刀の削り痕もそのままであります。雨の降る日には、土間で独楽をまわした。そして、よく、かち当てた歎石もちゃんとしていました。なにもかも、昔のままであったのであります。

息子は、ぼんやりとした気持ちで、二、三日は過ごしてしまいました。

「お父さんは、都へおいでになりませんか。」と、息子は、いいました。

「いや、どうして、この長く住み慣れた家を、捨ててゆけよう。」と、父親は、頭を振りました。

「おまえこそ、ここへ帰ってきて、いっしょに暮らしたがいい。」と、父親は、息子に向かっていいました。

息子は、都に残してきた、仕事のことを思い出しました。そして、どうしても都に帰らなければなりませんでした。

二人は、たがいに別れて暮らさなければならないのを悲しく思いました。

「これは、おまえが子供の時分に、裏の庭さきで拾って大事にしていた石だ。」と、父親はいって、床の間の台の上に乗せてあった黒い石を取りあげて、息子に見せました。

「私は、おまえが子供の時分に、持っていたおもちゃは、みんな粗末にしないでしまっておく。そして、ときどき出してみては、おまえのことを思い暮らすのだ。」と、父親はいいました。

これを聞くと、息子は、どんなに父親の情けをありがたく感じたかしれません。そして、その黒い石を、手に取ってつくづくとながめますと、やはり、自分にも子供の時分のことが思い出されたのであります。

ほとんど、幾十年の間、その石は、故郷のうす暗い、家の床の間

に、ほこりを浴びて置かれていました。

「お父さん、私は、この石を持っていってもようございますか？」

と、息子は、父親にたずねました。

「ああ、いいとも、おまえの持ってゆくぶんにはさしつかえない。なんでもほしいものがあったら持ってゆくといい。」と、父親は答えました。

長い、長い間、こうして、じっとしていた石が、ここから、どこかへ、まったく知らぬところへ持ってゆかれることになりました。それは思いもよらないことで、変化というものがどんなものの上にもくることを、思わせたのであります。

石は、息子のかばんの中へ、紙に包まれてはいりました。

彼は、また外に出て、子供の時分、よく遊んだ草原へやってきました。そこには、いろいろな草が、紫や、青や、白の花を咲かせていました。その花は、このあたりにはたくさんあっても、都ではとても見ることができませんでした。彼は、その花の一つ、一つを昔のお友だちにでもあったように、なつかしげにながめました。とんぼが飛んできて、かがやかしい羽を、花に止まって休めています。それに、じっと見入っていると、そのころ、いっしょに草の葉や、花をつんで遊んだ近所の女の子や、男の子の姿が、ありありと目さきにちらつくように映ってくるのでした。

しかし、その女の子も、男の子も、もういまではこの土地にはいません。みんな大人になって、女の子はお母さんになり、男の子はお父さんになっているのです。けれど、この草原の景色は、昔とすこしの変わりもありませんでした。草に咲いている花の色も、またとんぼの羽もすこしの変わりがありませんでした。

息子は考えました。「この草も都へ持ってゆこう。そして、朝晩ながめて、故郷のことを思い、子供の時分のことを考えよう……。」と、彼は、紫色の花の咲いている草を、根をつけて掘り取ったのであります。

やがて息子は、都に帰ることになりました。父親に、別れなければならぬ悲しみで、胸いっぱいにして旅立ちました。

汽車は、くるときと同じ道を通って、ついにふたたび故郷から遠く去ってしまったのであります。

幾百里も、遠いところを石と草とが運ばれました。石や草はどうして、こんな遠いところへくるなどと思ってましたでしょう？

息子は、植木屋に、草といっしょに石も鉢へ移させました。そして、草と石とを、ときどき見ようとしたのであります。植木屋は、鉢の中へ、草を植え、程いいところへ石を置きました。

「これで根がつけば、たいしたものです。」と、植木屋はいいました。

息子は、植木屋に向かって、「これをどこに置いたらいいだろうか。」と聞きました。

「さようです、寒いところに生える草ですから、風当たりのいい、高いところがいいと思います。」と、植木屋は答えました。

息子は、これをバルコニーに出しておきました。そこからは、都会のいろいろな工場から上がる煙が黒くなって見られました。ちょうど黒いへびのはい上がるように、いつしか青い空に、煙は吸い込まれて消えているのでありました。

また、いろいろの、巷から起こる音が聞こえてきました。風は、いままでは、つねに南から吹いていましたが、だんだん北から吹く

ほうが多くなると、季節も変わって、熱さは去っていったのです。

つばめは鳴いたり、すずめもまれにきて、屋根の上などで鳴きましたけれど、草は、故郷の草原で聞いたような、いい小鳥の声にはふたたび出あいませんでした。

太陽は、東から出て、西に沈みました。けれど、あの黒い森影から上がって、あの高い雲の光る山のかなたに沈むのではありませんでした。いつもほこりっぽい建物の屋根から上がって、あちらの屋根の間に落ちるのでした。草は、夜々、大空に輝く星の光を仰いで、独りさびしさに泣いたのです。故郷の露深い、虫の声のしげき草原が慕われたからです。そこにいまもなお花の咲いている姉妹や友だちがいるのが、かぎりなく恋しかったのです。

ある日、草は、下に黙ってすわっていた石に向かっていいました。

「あなたも、遠くからきなされたのですか。」

「ええ、やはり汽車に乗って、あなたといっしょにまいりましたのです。」と、石は答えました。

すると、草はさも疲れたというようすをして、

「あなたは、体がおじょうぶですから、どこにいられてもいいのですけれども、わたしは、もうこんなに弱っています。ついここにくるまでは、はかない自分の運命というものに考えつかなかったのです。」と、さも後悔したように語りました。

これを聞くと、さすがに黙っていた石も、感慨に堪えないふうで、

「私は、長い幾十年かの間、無事に暮らしてきました。そして、おそらく、永久にそのように暮らされるものと思っていました。それが、思いがけなく、こんな身の上になってしまったのです。これから先のことを考えると不安でなりません。」と、石はいいました。

やさしい草は、自分の身を忘れて、石に同情したらしかった。

「けれど、あなたはおじょうぶですから、安心なさいまし。わたしは、枯れれば、明日にもあの人通りの多い道の上に捨てられてしまうかもしれません。そうすれば、あの怖ろしい車や、馬にふまれて、わたしの体は、跡形もなく砕かれてしまうでしょう。」と、草はいいました。

「いえ、私だって同じことです。」と、石はいいました。

こうして、草と石とが相慰め合ったのも、束の間のことでありました。草は、とうとう枯れてしまったのです。

息子は、草の枯れたのを、どんなに悲しんだかしれません。

「そのうちに、なにか、かわりのいい草を見つけてきて植えてさしあげます。」と、植木屋はいいました。

ある日のこと、植木屋は、バルコニーに上がりました。そして、枯れた草の鉢を持って降りてきました。なにか、それに代わりの草を植えようと思ったからです。

その後のことでありました。息子は、夜床の中にはいってから、枯れた草や、持ってきた石のことを思い出しました。せめてあの石なりと大事にして、記念にしておこうと思いました。そして、夜の明けるのを待ってバルコニーに出てみますと、いつのまにか、そこには新しい草の植わった鉢が置いてありました。そして、もとより枯れた草も、石も影だに見られませんでした。

「この草は、どうしたのだ?」といって、家内のものに聞きますと、

「昨日、植木屋が、あなたのお留守に持ってきましたのです。」と答えました。

息子は、枯れた草はしかたがないとしても、石は、どこへいった

ろう。植木屋に聞いてみようと、さっそく、植木屋を呼びにやりました。

「あの、草の下にあった、黒い石でございますか。つまらない石だと思って、捨ててしまいました。」と、植木屋は答えました。

息子は、これを聞くとたいそう驚きました。

「あの石は、私の大事な石だ。どこへ捨ててしまった?」と問いました。

すると、植木屋は、しばらく考えていましたが、

「たしか、ここからの帰り途に、あちらの広い空き地に捨ててしまいました。」と答えたのであります。

その空き地は、もと建物があったのですが、いまはなにもなく草が茫々として生えていました。そして、子供らはその中に遊び、通行する人たちは、近道するために、その空き地を横ぎったのであります。

息子は、どんなに、がっかりしたかしれません。どうしても、その石を忘れることができませんでした。すると、黒い石が、夜露にしっとりと湿れて、広場の中で、月の光に照らされて輝いている夢を見ました。

ふと目をさましますと、外は、ちょうどその夢に見たようないい月夜で、小さな窓が明るく月光に照らされていました。彼は、さっそく、起き上がりました。そして、その広場へ、石が落ちていないかと探しにゆきました。

すっかり秋の景色となって、こおろぎが鳴いていました。うすもやが一面に降りて、建物の間や、林の木の間や、広場の上に渦巻いているようにも見られました。

息子は、あたりが、すでに眠静まった真夜中ごろ、一人広場にやってきますと、はたしてさびしい月の光が、草の葉をば照らしていました。

けれど、黒い石が、どこにあるか、もとより容易に見当てることができませんでした。彼はあちらへゆき、こちらへさまよっていますと、うすもやの中に、しょんぼりと立っている人影を見いだしました。

「いまごろ、何人が立っているのだろう。」と、怪しみながら、よく見つめますと、それは、美しい、若い女でありました。彼は、好奇心から、つい、そのそばに近づいてみる気になりました。

「いまごろ、あなたは、そこになにをしていられますか?」と、彼はたずねました。

美しい女は、ぱっちりとした、すずしい目をこちらに向けました。そして、彼を見ていましたが、にっこりと笑って、

「わたしは、かんざしの珠をさがしています。もう幾十年も前のことでありました。わたしは、お嫁にゆく前に、ちょうどこのあたりであった窓から、ある日の夕暮れ方、かんざしの珠をあやまって落としますと、それがころげてどこへいったか見えなくなったのです。それから、わたしは、いくら探したかしれません。お母さんからはしかられました。けれど、どうしても、なくした珠は見つからなかったのです。わたしは、一生そのことを忘れませんでした。今夜も、また、わたしは、その珠のことを思い出して探しにきたのです。」と、その若い女は、答えたのであります。

彼は、この話をきくと、なんとなく体じゅうが、ぞっとしました。女の姿を見ると、長い黒い髪は結ばずに、後ろに垂れていました。

若い、美しい女は、いっしょうけんめいに、足もとの草を分けて、珠を探していました。彼も、また草を分けて、なにかそのあたりに落ちていないかと、熱心にたずねましたけれど、べつになにも見あたりませんでした。

「どんな色の珠でしたか?」

こういって、彼は、顔を上げて、もう一度子細に若い女を見ようとしますと、どこにも女の影は、見えなかったのです。

不思議なことがあれば、あるものだと思って、しばらく彼は、茫然として、たたずんでいました。

月は、西に傾きました。そして、思いなしか、東の空は白んで、どこからか、暁を告げるに鶏の鳴く声が聞こえてきました。もやは、いつしか晴れて、空は青みをまして頭の上に垂れかかっていました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集　4」講談社
　　1977（昭和52）年2月10日第1刷発行
　　1977（昭和52）年C第2刷発行
初出：「中央公論」
　　1923（大正12）年12月
※表題は底本では、「山《やま》へ帰《かえ》りゆく父《ちち》」となっています。
※初出時の表題は、「山へ帰り行く父」です。
入力：特定非営利活動法人はるかぜ
校正：栗田美恵子
2020年5月27日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（https://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

山へ帰りゆく父

小川未明

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/